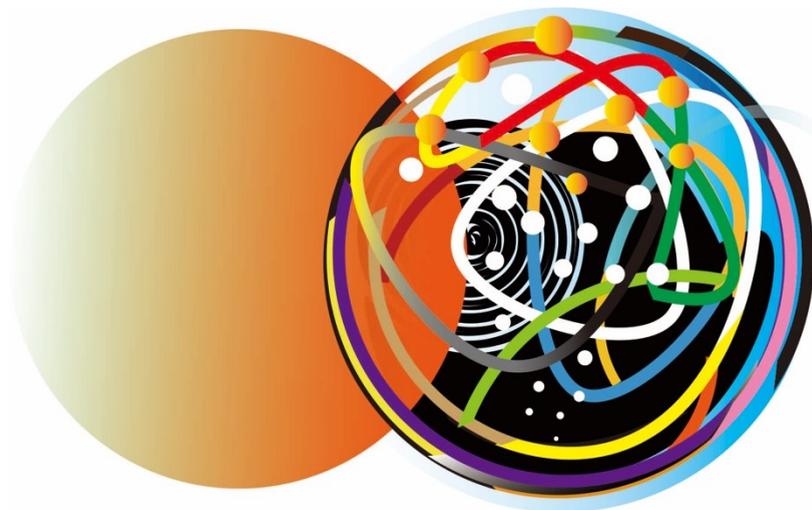


詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第 20 号
2021 年 9 月

目次

朝倉さやか	恋文	2	永松佑香	わたしの正体	32
相澤ゆかり	すぐに歳をとる	4	東野 潤	空の向こうへ	34
	あなたの新盆	6	紅屋菜緒	あたりまえとは	36
伊東とも	3月の風	1	前田希歩	水無月	38
	3月の風	2		彼女のメランコリー	40
	空中で	10	真野珠希	拝啓、憧れ	41
	ぐいぐい	12		とある大学生のつぶやき	42
	灰色の	13	渡辺信二	とある大学生の朝	44
	歩いて 歩いている	14		フロリッシュユ67	46
大内 凜	コロナ	16			
	流星	17	☆☆☆☆☆		
熊谷めぐみ	君はずっと前に死んで	18	表紙原画		
	わたしの見上げる空に朝靄はない	20	鈴木 順三	「彩りの記憶1」(表紙)	
関根全宏	日曜日の死	22		「彩りの記憶2」(裏表紙)	
	残り	23			
	港町にて	24			
	夜を乗り越えて	26			
田中はじめ	今を生きよ 年寄りよ	28			
	ニッポン哀歌	30			

恋文

朝倉さやか

ポストンの北、白い山々のあるところ

灰色リスの鬼ごっこ

徐行する車に、並走するキツネ

鳥の群れの映る湖面

しなる釣竿と、外来魚が殺される切り株

七面鳥の親子の散歩

人の気配に逃げるシカ

藪の下から覗くシマリス

落ち葉の下に消えた小径

ほとんど朽ちた倒木、と新芽

森の中の、崩れかけた石垣

噂に聞くヘラジカ

コヨーテの遠吠え

真紅と赤とオレンジと黄色の紅葉

朝一番の雪景色

濃い桃色の花をつけた木

一面のライラック

庭先のラズベリー

手のひらの上のカエル

ハチドリの喧嘩

夕暮れのファイアピット

目の端を逃げる流れ星

蛍の灯り、ひとつ

ボストンの北、白い山々のあるところ

2年も離れて、匂いは思い出せません。

はやくお会いしたいものです。

すぐに歳をとる

相澤ゆかり

「若いって凄いこと

そう呟いたのは 若い頃 凄かった人
ハイヒールを音高く鳴らして

男たちを睥睨し 世界をリズムカルに歩いた

「周りは男ばかりだったけど

思いつきり生きるのよ
だってすぐに歳をとる

「男たちはいつも女の子の若さ

可愛さばかり見てるけど

わたしたちの実力や可能性は そんなもんじゃない

「恋愛？ もちろんしたわよ

いい人がひとりいて 一時期 身も心も捧げたわ
だけど最後は プライドをズタズタにされた

「あの人 けつきよく 男

男は男だったのよ いい勉強だった
いい勉強なのよ そう考えないと老けちゃうわ

「あなた あなたも すぐに歳をとる
男にだって ほんとにいい人はいるよ きっと
思うとおりに生きなさい」

若い頃 凄かった人は そう呟いて
視線を遠くに走らせ
ゆっくり車椅子のブレーキを外した

あなたの新盆

相澤ゆかり

今年の夏は 郵便ポストまで出かけても
なぜか つがいの蝶と出会うこと多く
道端につい 足を止めて 眼であとを追う

蝶たち 空中に相見え 離れ 契り
絡み合い 不意に別れる その先に
それぞれ お目当てのお花があるのでしょいか

そうか そうなのですね
別れがあつて 当然でしょう
夏の日差しに しばし 目を瞑る

ですから この手紙は 昔 私たちが
住んでいたニューヨークの住所宛に出すので
投函しても こちらに戻ってくるだけ

でも あなたの遺した便箋を前に
あなたの言葉が 私に乗り移るようにと
そう願って 認めました

きつと 宛先不明郵便となり 再び
私の手元に戻る その頃は もう秋
私も元気になっっているでしょう

あなたのいないあなたの新盆

追伸

律儀なあなたは 郵便屋さんを気にするから 往復分で郵便切手
2倍貼ったけど でも配達不能郵便になったら やがて焼却処分
されて あたしの気配や匂いがあなたに届くかもしれないね

——おまえの Ω から あたしの α へ

3月の風 1

伊東とも

君は今日

言いたいことを言えたのか

どんなに3月の風が強くとも

あの大地を紫色に染めている花の名前を知らずとも
むこうの青い山に登れなくとも

君はその 唯一の曇りなき眼でもって

本当に 君自身に

今日

言いたいことを言えたのか

3月の風 2

伊東とも

歩道のうえの

アパートから落ちてる光が

やけにあったかくて

そうだもう夕暮れだっけと見上げた空は

やけにひろびろと青灰色で

わたしはなんでここにいるのでしょうかと

尋ねてみたくなる 3月の風に

もうすぐ春なのだけれど

体がおいついていない証拠なのか

この居場所を忘れるような

さみしさは

空中で

伊東とも

見あげてから 跳ぼうと思う
こんな 春の どこまでも続く
青い朝には

体育館シューズの 紐が解けたばかり
くしゃつと丸まった銀紙が 落ちている 水溜り

数羽いた鳥もいなくなってしまった
校庭のまだらなピンクの木に
わずかばかりの寂しさが ひっかかって
揺れている

合図のように
ちらちら 光って 誘われるのは 人体の私
目に刺さってくるのは 電柱たち

いいよ という声もなく
残された羽音が 空中で
ふるえるふくらむ

ぐいぐい

伊東とも

新しい緑の色が

むこうからぐいぐい迫ってくるのが春

影を淡くさせて ふりきって

隣の家からもやってくる

わたしが目を細めなくても

まっすぐに届いてくれるのが春

でも 気づいたら 膝の裏側が

やたら脆弱に感じる

立っているのが やつとな春

灰色の

伊東とも

誰にもあげられないもの

わたしの記憶にどこか眠るだけのものは

2021年の春

曇り空が 色を重ねづけているあいだ

鳥たちがぐるぐる旋回していく

若緑色の桜の木々のむこう

視界が切りとられたなかでの光景は

そのまま 全部 わたしのもの

それから思い出そうとしては

眠りに引きづられて

わたしも またすこしずつ

灰色の春のかたまり

歩いて 歩いている

伊東とも

わたしはずいぶん浮かれて歩いていた

春も夏も秋も冬も

どんなときも浮かれて

鳥たちはいつまでも頭上で

飛んでいてくれるようだった

時おり

ロマンチックな気持ちになって詩を書いたり

愛とか

宇宙とかについても考えた

そして色んなひとと話した

それから

いつしか

やってくる死を思うようになった

人生が半分 折りたたまれた気持ちになって
首をかしげても

折りたたまれたむこうは見えないもんだから
まあいいかと

むこうのわたしは

はつきりと ひとりだった

わたしは浮かれて歩きつづけたい

頭のなかを薔薇色にして
ピンク色の可愛いやつでいっぱいにして

今日も誰かにこんにちはと言って

わたしはひとりじゃないと

そんなあたたかさのなかに歩いている

そうやって 歩いて 歩いている

コロナ

大内
凜

見上げた空の真珠色は

宇宙を照らす王の冠

中二の夏の四時間目

子供のペンはノートを走る

見下ろす影は無彩色

地球を蝕む小さな悪魔

仕事終わりの午後八時

大人の足は復路を歩く

続くはずの日常は

歪んで元に戻らない

誰もが知ってる太陽は

誰もが知ってる悪魔に変わる

流星

大内
凜

数えきれない星の中

目指しているのは流れ星

輝きは遠い紺碧の中

手を伸ばしても届かない

それでも見失うことはない

彗星みたいな黄色い希望

毎日落ちる金平糖を

拾って作る励ましのブーケ

今はなにも見えなくても

いつかきつと流れ星になって

星空の中を飛んでいけ

夢の先へ宇宙を超えて

君はずっと前に死んで

熊谷めぐみ

君はずっと前に死んで
なんだか私は生きている

君は100年以上前の人で
私は100年以上後の人

君は日記に書いて
私はそれを読んで

そうしたら
そうしたら

君と私の過去と今が
バチっと重なって一つに

その瞬間をたしかに感じて

君はずっと前に死んで

なんだか私は生きているけど

わたしの見上げる空に朝靄はない

熊谷めぐみ

まだ虹もかかっていないけれど いい感じだ
誰も見向きもしなそうな この空は

朝に息をすると 夜に息をする二倍空気が澄んでいるような
だけど少し苦しいような そんな気がして
それがなんだか嬉しくて
今朝もひとり呼吸する

好きにすればいいと言われて
好きにするのが自由だと思っていたけれど
それが違うと今ならわかる
責任を取ればいいわけじゃないと

そんなことを思うくらいには
この空は 優しさに満ちている

誰も見向きもしなそうな
詩にはとても詠まれそうもない
この空には

日曜日の死

関根全宏

晴れた日曜日だというのに
君が死んだことを知り

あの日 洗濯機は音をたてて
急に黙りこんだ

シャツや靴下を濡らしたまま

他のことは覚えていない

ただ その時はじめて

自分が異物であることを知った

その定めをなぞるように

今 また一篇の詩を書いた

季節は夏

躰が重い

冷たい桃には

齧った跡が残っていた

残り

関根全宏

あの日の夜、家に帰った僕を出迎えてくれたのは君ひとりだけだった。僕は心のどこかで

それを予想していた気もするけれど、

いざ、君を目の前にすると

僕の言葉は、もはや使い物にならなかった。

それから仕方なく、冷めたチキンを食べた。

何の味もしなかった。

だから、力まかせに黙って食べた。

ただの異物でしかなかった。

何かが不足していたのだろうか。

それとも過剰だったのか。

ただ、異物が君のからだの中に残り

確かに僕の一部にもなり、僕らはそれを

月にして夜空に浮かべ、抱擁することを誓った。

港町にて

関根全宏

僕らは何を話すわけでもなく、港町の小さな浜辺で海を眺めていた。八月の青空の下、目の前にある海は

きらきらと揺れていた。その煌めきを眺めながら僕は今までのことを思い返した。

彼女がこの町で過ごしていた時、僕はずっと遠くにいた。誰かと一緒にいても、僕はいつもひとりだった。

これまで僕が辿ってきた場所と時間はもう二度と取り戻すことができないけれど、

それは、失われたものであるなら、僕の手の中に永遠にあるに違いないと思った。

彼女がこの町で過ごしていた時、僕はずっと遠くにいた。
彼女は時折、足で砂をいじっては、沖を見つめる。

近くには 死んだ魚 魚の死骸が
もうすぐ午前十時になるところだった。

夜を乗り越えて

関根全宏

カラスが屋根の上をコツコツと歩く音で
目を覚ました 朝はまだ早い

外は少し白みはじめていた

誰もいないリビングに大きな窓

カゴにあるグレープフルーツ

秒針のない時計

昨夜食べた味のないチキン

ナイフとフォーク 沈黙

月はまだ出ているだろうか

コーヒーを手に 僕はぼんやりと考える

これまでの人生に どれほどの間違いが

あっただろうか もちろん 後悔することは

あった けれど もう一度この人生を

やり直すことができるとしたら

僕は 同じ場所にいるのだろうか
多分 確率は五分五分だ でもまあ
いいさ どこにいたって
こうして夜を乗り越えていくだけだ

冷蔵庫が低く唸り 氷が落ちた

鼻から息をゆっくりと吐きだす

新聞配達のパイクが いつも通り十字路で

朝七時のクラクションを一度だけ鳴らした

僕は分かっている それが一日の始まりを告げる

一人分の孤独の合図だということを

今を生きよ 年寄りよ

田中はじめ

寄る年波に 負けるな 年寄り
青天はなお 向こうに輝いている

ジャックナイフのように

専門用語をカタカナで振り回す

黒くて妖しい瞳の

若い女性に飲み込まれ

訳もわからず

スマホを契約するな 年寄りよ

怒れ 年寄り

おのれの気弱さに怒れ

マシンガンのように

データとチャートで狙い撃ちする

若い男性に持ち上げられて
訳も分からず
契約を結ぶな 年寄りよ

怒れ 年寄り
おのれの欲深さに怒れ

いいか 年寄り
今以上に もっといい目に遭うことなぞ
決して ないと思ひ知れ

津波のように押し寄せる老齡に慌てず
じぶんの頭で考え
じぶんの足で歩く
その自負心を信じてることだ

ニッポン哀歌

―若き高村光太郎「根付の国」に倣って

田中はじめ

辺境の国は

いつも 息浅くして

肩で呼吸し

酸欠と貧窮のなか 生きる

金に乏しく

知性に乏しく

恥の上塗り

無知とも知らず

なお本分の帰郷 何の消息を必要とするのか

故郷での意見を無視し

中央からの批判には直ぐに土下座する

すくつと立ち上がれば

かきつばたを踏みつぶし

金と地位に飢えるが

美と知性に飢えたことがない

永遠の中間管理職として

サム伯父さんへ上目を使い

トム叔父さんたちを見下して生きる

ニッポン ニッポン

ああ わがニッポン

わたしの正体

永松佑香

この時期になると
ここへやってくる君

私の写真を見て
時々悲しい表情を見せる君

君の隣に立ってみる
二人仲良く並んでみるけれど
影一つ

沢山伝えたいことは
あるけれど
これはまたいつか

来年も待っています

私の目の前にある
菊の花が
可憐に揺れた

空の向こうへ

東野
潤

あの空は 海の青に染まったのか
それとも 私たちの
ブルーな気持ちを映しているか

あんなに空が青いから
きつと あの向こうには
ほんとうの家がある

あるのだと信じて
私たち 飛び続けてきた
もちろん 危うさも険しさも想定できる

裏切りは考えなかった
私たち 他者の定めまで
担うことはできないのだから

青は虹の向こうで
さらに青くなると言う
今はもう 明日の飛翔を思う時だ

あたりまえとは

紅屋菜緒

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

水無月

前田希歩

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

彼女のメランコリー

前田希歩

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

拝啓、憧れ

真野珠希

体育で削れた今日の体力
ねぼけまなこで弁当を食べる
流れ込む風に塩素の匂いが混じり合う
あくびを噛み殺す
次の授業はなんだっけ
ロッカールームから外を眺める
道ゆく人物に既視感
あいつ、またサボるのか
癖というものは治らない
白昼堂々、まるで散歩している人のように
外にいるはずのない制服が通学路を闊歩する
何を考えているのか
昔からの付き合いなのに
自由を求める抵抗と勇氣
小さな尊敬と普遍的な軽蔑をため息に変えて
教室に戻った

とある大学生のつぶやき

真野珠希

気づけば二時半

机は散乱

課題は進まん

明日の朝にはきつと狂乱

夜更かしのお供は生配信

レポートのテーマは作品論

インスタばかり即更新

重い腰あげてパソコンON

お肌は荒れぎみ

思わずため息

お布団はいずこ

眠気にシフト

何か良いことないかな
明日はきつと良い日になるよ
効率悪くなるキーボード
こんな夜も悪くない

かも？

とある大学生の朝

真野珠希

おはよう月曜

早起き成功

少しは成長？

早速始めよう課題の推敲

提出期限まであと三時間

これが終われば決めよう一蘭

最後まで抜かりなく確認

余裕を持ってmanabaにログイン

まさかの事態

画面が動かない

思わぬエラー

気分はクレーマー

落ち着け自分

再起動しよう

もしものための時間配分

どうせよくあるエラーだろう

あ、提出できた

解散！

フロリツシユ67

渡辺信二

パウンドさん この民泊は英語だけ

ガイジンと言えば みな

アメリカ人のこと

南を向けば 海

東は 大西洋を挟んで 西海岸の大森林

鬼門には 氷河のバラ園

五七五を打ち壊すことが

一生の目標だったけど

日本ノ新聞 毎日 朝刊ノ一面ニ

詩ヲ載セテルテ 凄イ

え? 詩ですか

ホラ ココ

あ それ 俳句ね

俳句テ 詩デシヨ?

てめえの舌を切り取ってやる

白亜紀の頃 人は 何を食べていたのか

「大切なのは文化水準」

そんなこと アメリカ人のあんたに言われたくない

手元のモンブランで メモを取る

観音桜が ガラス窓に映える

慰めにはならないが

一生懸命ヤレバ 何デモ

誰デモ認メラレル国テ 素敵

結果気ニセズ 全力疾走デキル

徒競走 負けて舐めるな グランドの土

トージョーさんだって スガさんだって

皆一生懸命だったんだって

たかだか五〇〇年の歴史だろ

アジアには手を出すな

ヴェトナム アフガニスタン

こちとら コーキ2681 ロッキードの話じゃない

四阡年前 夏を起源とする国には負けるが

今はもう エアコンで季節知らず

お世話になったけど あいつらに背を向け 東へ走り出す

ケンジだって アヤに振られて 一念発起

一旗あげるには ロスアンジェルスのアカウンター
西洋の西のアメリカの さらに西にあるのが

ニッポンだけど いつかまた

言ってやりたい 習近平

日が沈むのは そっちの方角だ

あんた 論語を忘れたか

とうもろこし畑の草取りは辛いけど

空き地を横切ればいいのだと エズラが言っていた

「季節が死に絶えぬうちに

西風に運ばれて われら 朝日に屹立せんとす」

茂る若葉の 露を結んで

つぎつぎに はじけ飛ぶ

朝日出版社の提供により、この4月から始まったWEB上の詩作品投稿サイト「あさひてらすの詩のてらす」では、詩作品を募集しています。世話人は、千石英世、平石貴樹、渡辺信二の3名です。既に、第7回を数えますが、ぜひ、訪問していただき、また、投稿もお願いします。鈴木順三氏のデザインも鑑賞できます。URLは、<https://webzine.asahipress.com/categories/928> ですが、あさひてらすの詩のてらすで検索すれば、すぐ、見つかります。

2021,03,01以降に贈られた詩誌

- 『りんごの木』57号、58号。
- 『白亜紀』160号。
- 『万河・Banga』25号。
- 『GATE』32号。
- 『銀曜日』51号。
- 『コールサック』105号、106号。

詩集

- 鈴木比佐雄『千年後のあなたへー福島・広島・長崎・沖縄・アジアの水辺から』。コールサック社、2021年。
- 長尾早苗『聖者の行進』。七月堂、2021年。
- ロバート・フロスト詩集『西に流れる川』藤本雅樹訳。2021年。
- 網谷厚子『万籟』。思潮社、2021年。

その他書籍・論文・エッセイなど

- オベロン会『OBERON』。第43巻第1号、2020年。
- 須永豊『歌って英文法一名曲でマスターする“一生モノ”の英語』。幻冬舎、2021年。
- 阿部公彦『英文学教授が教えたがる名作の英語』。文藝春秋、2021年。
- 田中泰賢『日本の心に共感したアメリカ文学』。開文社出版、2021年。
- 諏訪部浩一『土にまみれた旗』。河出書房新社、2021年。
- 『死生学年報2020』東洋英和女学院大学死生学研究所編。2020年。
- 『英米文学』立教大学文学部英米文学専修。No.81、2021年。
- 『立教レビュー』立教大学文学部英米文学専修。50号、2021年。



詩誌『立彩』第20号 2021年9月20日発行

頒価 300円

編集発行 「立彩」

〒400-8555 山梨県甲府市横根町 888

山梨英和大学人間文化学部 渡辺信二研究室気付

印刷 東洋出版印刷株式会社 TEL 03-3813-7311

予告：第21号から『立彩』編集室が下記に移転します。寄贈
詩誌・詩集もこちらへご送付をお願いできれば幸いです。〒
173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1

東京家政大学人文学部英語コミュニケーション学科
関根全宏研究室気付